

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

悲劇の言語学者ラスムス・ラスク : 大学入学直後

著者	山本 文明
出版者	法政大学国際文化学部
雑誌名	異文化．論文編
巻	7
ページ	51-78
発行年	2006-04-01
URL	http://hdl.handle.net/10114/3613

悲劇の言語学者ラスムス・ラスク

——大学入学直後——

Rasmus Rask, a tragic linguist

—just after matriculation—

山本文明

YAMAMOTO Fumiaki

(拙稿は「悲劇の言語学者ラスムス・ラスク——誕生から大学入学まで——」
〔異文化〕6) に続くものである。)

ラスクがコペンハーゲン大学の入学許可を得たのは1807年だが、実際に大学で学び始めたのは翌1808年のことであった。大学入学のために、ラスクがコペンハーゲンに到着したのは、もう少しで二十歳になろうという1807年11月のことであった。オーゼンセからの行程は今日のように楽なものではなかった。19世紀初めのデンマークで、ラスクが住んでいたフューン島のオーゼンセからシェラン島にあるコペンハーゲンへ移動することは容易ではなかったのである。まず、陸路は馬車と徒歩であったが、馬車も定期便はなく郵便馬車に便乗するほかはなかった。ラスクは、最初は陸路でフューン島南端のスヴェンボー (Svendborg) に行き、そこから船ですぐ南方のトースィング (Tåsinge) 島、さらにランゲラン (Langeland) 島に渡った。ランゲラン島からは東に位置するロラン (Lolland) 島を経て、東隣のファルスター (Falster) 島のニューケーピング (Nykøbing) に着いた。オーゼンセを発ってここまでどのくらいの時間がかかったのかは正確には分からないが、大変な長旅であったことだけは確かである。ニューケーピングには2、3日滞在し、父方のおじに会い、当地の高等学校 (gymnasium) の校長になっていた恩師ブロックを

訪ねた。ファルスター島から北方に位置するシェラン島に渡ったラスクは、フューン島を出て5つの島を巡る迂回路をたどったことになる。フューン島からシェラン島に渡るには、後には定期便が通うようになり、フェリーが造られ、さらには列車ごと収容できる大型のフェリーも運航したが、当時は不定期便の船旅で大きく迂回する大旅行であった。

このような旅行の間ラスクは有効に時間を使った。それぞれの土地で方言を観察し、後のデンマークの方言研究の資料を蒐集したのである。ラスクは、インドへの研究・調査旅行も含めて、これ以後も旅行する先々で立ち寄った土地の言語をネイティブ・スピーカーから直接習得し、壮大な言語研究の基礎固めをしていく。シェラン島の最南端に上陸してからは、馬車で北上し当時交通の要所のひとつであったロスキレ（Roskilde）を経て、厳戒態勢下のコペンハーゲンに入ることになる。ロスキレは、歴代のデンマーク王の墓があるロスキレ大聖堂（Roskilde Domkirke）で知られる中世以来の古い町で、近くのロスキレ・フィヨルド（Roskilde Fjord）では、ほぼ原形をとどめたヴァイキング船が発掘され注目された。発掘跡にはヴァイキング博物館が建設され、今では多くの訪問客や観光客を集めている。復元されたヴァイキング船を見た人々は、このような船で、ヴァイキングたちは紀元1000年に北アメリカ大陸に到達したのかと往時の彼らの勇姿に夢を馳せるのである。このロスキレとコペンハーゲンとの間に、デンマーク最初の鉄道が開通したのはラスクの死後しばらくたった1847年のことであった。その後も、デンマークでは、島嶼地方間、および島嶼地方とヨーロッパ大陸を結ぶ交通が懸案事項であったが、1998年にフューン島とシェラン島との間のストアベルト（Store Bælt）と呼ばれる海峡に橋が架けられ、自動車道・鉄道が開通した。オーゼンセ・コペンハーゲン間の電車の所要時間は片道約1時間15分で、現在では人々は気楽に日帰り旅行ができるようになっている。ユトランドとフューン島との間のリレベルト（Lille Bælt）にはすでに1980年代に架橋は終わっており、2000年にシェラン島とスウェーデンとの間のエーアスン（Øresund）が地下トンネルと橋とで接続されたことによって、デンマークは東西でヨーロッパ大陸とつながり、交通の利便性は一気に向上した。現在のデンマークの交

通事情はラスクのころとは隔世の感がある。しかし、このような便利な移動手段が当時存在していたとしたら、後のラスクの言語研究の方法は形の変ったものになっていたであろう。行く先々の言語を直接ネイティブ・スピーカーから習得し体系化するというラスクの言語蒐集の手法は、必要に迫られて島から島を巡らざるを得なかった過酷な旅程から生まれた副産物だったからである。なお、デンマークの象徴でもある陶磁器ロイヤルコペンハーゲンのマークの王冠は立憲君主制を表わしているが、その下の3本の波線は3つの海峡エーアスン、ストーアベルト、リレベルトを表わしている。

ラスクは、生涯をとおしてのよき理解者であり経済的な援助者であったフーン島の莊園主ヨハン・ビュロウ (Johan Bülow 1751-1828) に宛てた手紙 (1808年11月29日付) の中で、この旅について軽く触れている。この手紙は、イェルムスレウとビエロムの編によるラスクの『書簡集』の第2番目に収録されたもので、ビュロウ宛の手紙としては最初のものである。手紙は「閣下は、私が当然お知らせすべきであった旅等についての報告を、今か今かとお待ちであったことと拝察いたします。しかしながら、こちらに到着いたしましたのはやっと2、3日前でございましたし、それからレゲンセンに移り住んだということもありました。こちらでは、本棚やほとんどすべてのものに事欠いておりましたので、まったく混乱いたしておりました。このような理由のために、ヴェアラウフの2冊の小冊子 (『書簡集』の注によれば、E.Chr. ヴェアラウフ (Werlauff) による北欧の考古学史 (1807) と北欧のサガに関するもの (1808) で、おそらくラスクがオーゼンセを出発する前にビュロウに入手を依頼されていたのであろう) をいまだにお送りできずにありますことをお許しください」という報告が遅れたことへのお詫びの文章で始まっている。ラスクのコペンハーゲン到着の年月日と手紙の日付から判断すると、おそらくコペンハーゲンに着いて何日かして書きかけたものの、毎日の生活に追われて書き続けるのが1年後になったと思われる。さらに「旅はすばらしいもので、私にはとても興味深いものでした」と総括した上で、すでに上で述べた旅の行程を簡潔に説明し、「それから全力でコペンハーゲンに向かいました」と旅の話はこれで締めくくられている。ラスクのコペンハーゲンでの

希望に燃えた研究生生活では、オーゼンセからコペンハーゲンまでの厳しい旅はすでに過去の思い出の1ページに過ぎなかったのであろう。また、コペンハーゲンに住み始めて1年がたっているため、旅の臨場感はすでに感じられない淡々とした表現になっている印象を受ける。旅は「興味深いものでした」という意味は行く先々での方言研究に成果が上がったということであろうが、最後の「全力でコペンハーゲンに向かいました」という記述は、当時のラスクの一刻でも早く首都の大学で学びたいというはやる気持ちをよく表わしている。

ビュロウにラスクを引き合わせ、その才能を伝えたのはすでに前で触れた歴史家パーゼンで、それはオーゼンセ大聖堂学校時代のことであった。ビュロウ自身は軍人出身で、高等教育を受けたわけではないが、学問には深い関心を寄せていた。彼は幼いころに篤志家の世話になったことがあったため、自分が人に援助を与えることができる立場になったとき、なにか世の中のためになることはないかと考えた。自分が十分な教育を受けられなかった分、学問や文化や芸術の発展に尽力しようと考えたのである。とくに、彼は古い北欧の歴史や文化に深い関心を示し、ラスクが古エッダの研究をする際には援助をするという約束をしていた。彼はフレゼリク6世がまだ皇太子であったころから信任が厚った。皇太子の堅信札を祝う民衆に應えるためにコペンハーゲン市内で行なわれた行進では、宮内長官として皇太子の隣を歩いたほどであった。このビュロウの経済的援助がなければ、ラスクは好きな研究に専念することは不可能であったろう。ビュロウはお金は出すが口は出さないという主義の篤志家であったが、ラスクは生活や研究経過の報告等、ことあるごとにビュロウへ手紙を書き送っている。前記の『書簡集』にもラスクがビュロウに宛てた手紙が数多く収録されている。

ラスクが夜間外出禁止令が出されている首都コペンハーゲンに入ったのは1807年の11月であったことはすでに述べたが、彼には瓦礫の山も家を焼かれた住民たちの窮状も眼中にはなかった。おそらくは、ラスクの頭の中は大学で勉学に打ち込めるという喜びと希望でいっぱい、聖母教会（Vor Frue

Kirke) が焼け落ちた姿も目に入らなかったであろう。この教会は、コペンハーゲンの象徴とも言える教会で、建立は1200年頃だが、1728年の大火で全焼し、1731-44年に再建されたばかりであった。象徴的な建物であったからこそ、聖母教会はイギリス軍の砲撃的となり、再び崩壊したのである(現在の聖母教会は1811-29年に建設されたもので、中に飾られたデンマークの誇る芸術家B.トーヴァルセン (B.Thorvaldsen 1770-1844) によるキリストと十二使徒の一連の彫刻がよく知られている)。ラスクが入ることになっていた学生寮レゲンセンは、この聖母教会のすぐ近くにあるが、幸いなことにイギリス軍の攻撃と火災の被害を免れていた。

学生寮レゲンセン (Regensen) は、Collegium regium 「王立学生寮」のことで、クリスチャン4世の命により1618-28年にかけて建設され、入寮は1623年から行なわれた。120人ほどしか収容できない小さな寮で、デンマーク各地からの優秀な学生を無料で住まわせ勉学に専念させる施設だが、収容人数に限界があるため、誰でも入れるというものではなかった。ラスクの優秀さはレゲンセンへの入寮が許されたことでも証明される。ラスク伝のひとつを書いたイエスベルセンが、父親の死後ユトランド半島から首都コペンハーゲンのあるシェラン島へ引っ越す際、母親がイエスベルセンがコペンハーゲン大学に入り、レゲンセンに入寮できる可能性のある高等学校に転校させたことはよく知られている。イエスベルセンが転校した高等学校からは、当時は毎年2人がレゲンセンに入ることができたからである。この事実から判断しても、この寮がエリートが、寮費免除で、勉学に打ち込める施設として定評があったことが分かる。レゲンセンは、何回かの改修を経て現在もなお使用されている学生寮で、幾多の学者・有名人を輩出してきたことから、細い通りをはさんでやはりクリスチャン4世の治世に建設された円塔とともに、観光客が一度は訪れる名所のひとつとなっている。

ラスクは、当時のコペンハーゲンの荒廃について、日記でも手紙でもまったく触れていない。ラスクにとって重要だったのは、周囲の環境ではなかった。コペンハーゲンには、新しいことを学べる大学があり、本に囲まれて好きな研究に没頭できるレゲンセンという学生寮があれば十分だったのである。

ラスクが入居したのは小さな暗くて日当たりの悪い部屋であったが、コペンハーゲンに住んでいる間、ラスクはずっとそこに住むことになる。後に、イエスペルセンは、コペンハーゲン大学教授として、また、学長も務めた立場として、レゲンセンを郊外へ移転させてもっと健康的な学生寮にすべきだと主張したが、ラスクが健康を害した理由のひとつが日当たりの悪い部屋での研究生活にあったという思いからであった。

コペンハーゲン大学は、1479年、クリスチャン1世のときに設立されたが、最初は神学部だけの単科大学であった。中世のヨーロッパの大学がそうであったように、コペンハーゲン大学も最初はカトリック教会に属し、キリスト教の教理研究の場であったのである。1536年の宗教改革の後、ドイツに倣って、1736年に法学部、1788年に哲学部と医学部が増設され、4学部体制ができあがった。ラスクの死後、1850年に数学・自然科学部もできたが、まだ人文学部はなく、ましてや言語学科などというものは存在しなかった。オーゼンセ大聖堂学校を卒業したラスクは当然のように神学部に進んだ。最初のうちは神学で卒業資格（修士号）を取るつもりはあったようである。ラスクは、入学した1807年末の第一次試験も、翌年の哲学と文献学の試験もA評価を得ている。しかし、その道から外れて言語研究に専念するようになるまでにはたいした時間はかからなかった。ラスクが神学の講義をさぼりがちになったのを心配した神学教授ミュラーは、ラスクに講義への出席を促す手紙を書いた。ラスクはこのとき初めて自分が真にやりたいのは言語研究であることを告白することになる。ラスクの決意を理解したミュラーは、これ以後、ことあるごとにラスクの言語研究を支援するようになる。ミュラーは歴史や言語学にも一家言をもっていたことがラスクには幸いしたのである。後にラスクが国王フレゼリック6世から奨学金を得られたのも、ミュラーの推薦状があったからだと言われている。因みに、ラスク伝の著者イエスペルセンも、祖父以来の家業とも言える法律の道に進むべくコペンハーゲン大学の法学部に入学したが、まもなくもともと興味をもっていた言語学に針路変更したことがよく知られている。

ラスクは寮費免除の学生寮レゲンセンに入居を許されたものの、生活は楽

ではなかった。オーゼンセでは、実家からの援助、奨学金、篤志家からの援助で好きな勉強だけをすればよかったが、大学では状況は違った。オーゼンセ大聖堂学校からの奨学金はあったが、それは飢えないですむという程度の額であった。実家からの仕送りが期待できない身分では、貴重な勉学の時間を割いて、安い時間給で子供に算数を教えるアルバイト等をせざるを得なかった。とくに一年目の生活は苦しかった。ラスクは、学問を犠牲にして生活のために働くことを嫌ったが、その一生のほとんどはそうせざるを得ない不安定な生活の連続であった。1808年からは、大学図書館の助手の仕事を得たが、本が命のラスクにとっては、他に比べればむしろ喜ばしい職種であったと言えよう。

ペーターセンのラスク伝には、この当時の貧しい暮らしぶりを象徴的に表わした有名な一節がある：「彼（＝ラスク）は稼いだ分はすべて本代に使った。一年目は乾燥して固くなったライ麦のパンと水で一日中暮らした。一皿の暖かい食事を楽しむなんてことはまれなことだった。どうしても必要な場合は、彼は、夜、貧しさを恥じるかのようにいつものように古びた外套を着て、地下（の食堂）に下りて行って5スキリング（デンマークの古い貨幣単位で、ここでは値段が非常に安いことを表わしている）で温かい料理を手に入れた。彼の友人が覚えている当時の逸話によれば、レゲンセンの守衛が地下に行ってラスクの向かいに座っても、いつも知らないふりをしたそうである。しかし、彼の親しい友人が夕方訪問し、食事時間になると、何かご馳走しようと、彼は再び例の外套を取り出し、地下に下りて行って、何個かの暖かいジャガイモを襟巻きにくるんでもってきた。これに少しの塩を添えたものが夕食のすべてであったが、この食事はそれだけ強烈な心の糧というスパイスが効いていたのであった」（p.21）というものである。食費を極端に切り詰めて本代を捻出していたラスクにとっては、友人にこの蒸かしたジャガイモの夕食を提供するのは大変な散財であったはずである。「強烈な心の糧というスパイス」という表現がそのことをよく表わしている。

また、コーロンは、前掲の「ラスムス・ラスクの生涯についての寄稿」の中で、ラスクのこのような食生活に関して、ラスクのアイスランド人の親友

ビャルトニ・ソルステインソンが「この桁外れの人物に関する逸話をもうひとつ。彼は何日間も何も食わずにいて、その後たちまち、どこに入るのかと疑うほどたくさん食べることができました。私たちが夜に飲食店街に出かけたとき、そのことで嫌な思いをしたことはまれではありませんでした。そのような時や彼自身がもてなし役の場合は、どんな言い訳も役には立たませんでした。みんな彼と同じようにたくさん飲食しなければならなかったのです」(p.136)と述べていることを紹介している。ラスクが、だれとも接触せずに何日間も寝食を忘れて言語研究に没頭し、それが一段落すると思出したように周りを気にせず冬眠に入る動物が食べだめでもするかのように、食に没頭する様がよく描かれている一節である。イエスベルセンもラスク伝の中でこの部分を引用している。

このような儉しい暮らしの中にあっても、ラスクの勤勉さが衰えることはなかった。ペーターセンは続けてつぎのように言っている：「同時に、彼は昼の間ずっと研究したばかりでなく、夜の大半、普通は3時まで、研究をした」。そして、ラスクは懸命に言語研究に取り組むのだが、その生活は単調で、ときには苦勞して獲得した知識やアイデアを人に伝えたいという欲望に駆り立てられた。ラスクは、自分が発見した事実を詳しく説明し、自らの言語のシステムを披瀝し、それをゲルマン語やスラブ語に応用してみせたりした。聞き役は、ペーターセンを含む周りの友人であったが、それは徹夜におよぶこともあった。しかし、友人たちが彼の考えについていけないときは、「落胆し、悲しみ、腹を立てさえた」のであった。ラスクは、オーゼンセ大聖堂学校以来の親しいクローズやペーターセンが自分の研究をなぜ理解してくれないのかと溜息をつき、涙を流したのであった。ペーターセンは「それでも彼は幸せであった。まれに見るほど幸せであった。彼は自分が何をやりたいかを知っていたし、神は彼にそれをする能力を与えていたからである」(p.22)とその一節を締めくくっている。

ラスクは、オーゼンセで早くも多くの言語を習得していたことはすでに述べたが、コペンハーゲンでもほとんど無計画・非体系的とも思えるやり方で

さまざまな言語を獲得していった。しかし、一見恣意的に見える言語研究の中に、ラスクなりのシステムの構築に向けた意志を感知することは難しいことではない。ラスクは、まず古ノルド語の知識を深めることを目標のひとつとした。このことは後の古ノルド語文法の執筆の準備にもつながった。ラスクのふたつめの目標は、世界のあらゆる言語の文法を調べて言語に普遍的に存在するシステムを見つけることであった。

ラスクにとっては、古ノルド語以来大きな文法的な変化のない現代アイスランド語（この言語はまさに氷の国で長い間凍結していたように古い言語状態を保っており、若干の発音の変化は見られるものの、中世に書かれた文献を読むための辞書で現代の新聞が読めるほどである）は、事実上古ノルド語と区別する必要もない言語であったが、ペーターセンによれば、ラスクのアイスランド語に対する思い入れは非常に強いもので、「アイスランド語は、多くの言語、いやほとんどすべての言語の主たる源、根源である」というラスクの考えを引用しながら、「他の人たちがドイツ語やフランス語を話すあらゆる機会に、ある種の誇りと内面的な喜びをもって」アイスランド語を話すと言っていたと述べている。以下はそれに続くペーターセンからの引用である：「そのために、彼はアイスランド語を他の言語に優先して研究した。彼は北欧語についての文法的語源学（ラスクが用いる語源学とは、現在の一般的な意味「単語の起源」より幅が広く、「言語の歴史的研究」というほどの意味）、すなわち、ノルド語の最も古い起源、近親性についての研究をしたいと切望していた。「私はこのために長い間、非常に多くの事実を蒐集してきました。ほとんどすべての組織をギリシャ語やラテン語と同じように分類し、それどころかさらにそれを証明できるのではないかと考えているからです。語彙あるいは単語の語源も同様にかなり集めてきました。やろうとは思っていますが、その蒐集した資料をうまく整理できるかどうかは分かりません。私はこれまでできるだけ多くの言語の文法を調べ、すべてを私の原理に従い、すでに集めたり私自身が造ったりした純粋にデンマーク語の用語を用いて、整理し直そうとしてきました。ラップランド語、スウェーデン語、英語、オランダ語、ポルトガル語、イタリア語は完了し、ドイツ語に手をつけはじめまし

た。しかし、ギリシャ語とラテン語をおろそかにしたことはありません。これらは両方ともとても難しく、絶え間なくに注目しておく必要があります」と彼は書いている。これにロシア語、ポーランド語、ボヘミア語等いくつかのスラブ語の文法の草稿を加えることができる。彼は、これらの作業に関しては、すでに1809年にはとりかかっていた。北欧語とギリシャ語・ラテン語との関係については、上で引用した同じ書簡の中のつぎのような見解が読者の興味を引くであろう。「ギリシャ語（とラテン語）とゲルマン語（とくにアイスランド語とドイツ語）との間には極めて著しい類似性があります。以下若干の例を示しましょう（ここでは示された例の代表的なものを若干挙げるにとどめ、原文で用いられているギリシャ文字は、より一般的なローマ文字に直し、日本語訳を付して引用する）：ラテン語augeo「増やす、大きくする」、ギリシャ語auksanō「育てる、増やす」、アイスランド語auka「増やす、加える」；ギリシャ語bpōzō「食べる」、アイスランド語brauð「パン」；ラテン語caput「頭」、アイスランド語höfud「頭」等。これらを私はここではアルファベット順にまとめましたが、アイスランド語が分からない人たちが時代的に新しいゲルマン語の中では探すことのできない多くの新しい例を見つけています。しかし、私が考えているのは単語だけではありません。文法組織のほとんどすべてで私は極めて著しい類似性を発見しています：（ギリシャ語の）-osという語尾（男性名詞・単数・主格を表わす語尾）、ドーリア方言あるいはアイオリス方言-or、ラテン語-us、アイスランド語-ur（強変化男性名詞・単数・主格を表わす語尾で、ここでは現代アイスランド語の語尾が示されているが、古アイスランド語・古ノルド語の語尾は-rとなる）、（ギリシャ語の）対格は-on、アイスランド語の形容詞の-an（強変化形容詞・単数・対格の語尾）；派生的な音節、ラテン語n-ullus（= not any）、アイスランド語n-einn（= not any）（n-は否定を表わす副詞neに由来）等。非常に離れた場所にある言語間のそのような基本的な関連性を発見したことにより、私は時間の許す限り多くのヨーロッパの言語を研究するようになったのです」。さらに、彼は懸賞論文で詳細に述べられている名詞変化の組織についての説明を加えるのである」（pp.16-17）。一見無秩序に見える言語習得が、今日では当たり

前のように受け入れられているが当時はまだ未知であった言語の近親関係の学問的な解明へとつながっていることがよく分かる。

古ノルド語については、前述の1808年11月29日付のビュロウへの手紙の中で、「ニュロップ教授は、親切にも私をお招きくださったのですが、私がエッダについて考えていることをお話すると、ことのほか喜ばれました」と述べている。ニュロップ教授とは、ラスムス・ニュロップ (Rasmus Nyerup 1759-1829) のことで、ラスクとは対照的に常に日の当たる人生を歩んだ。コペンハーゲン大学の文学史教授、大学の図書館長、レゲンセン寮長を歴任し、同じフーン島出身者としてラスクの才能を高く評価し、終生ラスクの友人であり援助者であった。その著書としては、『デンマークとノルウェーの歴史的・統計的実像』(*Historisk-Statistisk Skildring af Danmark og Norge*) (1802-06)、『精選中世デンマーク民衆詩』(*Udvalgte Danske Viser fra Middelalderen*) (1812-19) (共著)、『デンマークとノルウェーの娯楽小説』(*Morskabslesning i Danmark og Norge*) (1817)、『デンマーク・ノルウェー・アイスランド文学事典』(*Litteraturlleksikon for Danmark, Norge, og Island*) (1818-20) 等がよく知られている。ここで特筆すべきは、ニュロップは1808年に新エッダ、いわゆるスノリのエッダのデンマーク語訳『エッダすなわち北欧人の異教徒の神話』(*Edda eller Skandinavernes hedenske Gudelære*) を発表した。ラスクはその仕事の有能な協力者であったという事実である。イエスベルセンはそのラスク伝の中で、『新エッダ』のニュロップの序文の一部「フーン島出身の若き学徒、R.K.ラスク」を「アイスランド文学の最も奥底にある神聖なものを将来解明する者として、我が学界の皆さんにお知らせできることを喜んでおります」という箇所を引用している。この年に大学に入っただけのラスクのことをすでに教授の地位にあったニュロップがいかに高く評価していたかがよく分かる。ラスクは、インドへの研究旅行から戻った後、レゲンセンでは寮長でもあったニュロップの住居の上の階に住み、毎日の食事にもニュロップとその娘ルイーセといっしょであった。なお、ラスクとルイーセとの関係については後述する。

古北欧語および最も忠実に古北欧語の面影を残しているアイスランド語の魅力にとりつかれたラスクが、アイスランド人と親しくつき合おうとしたことは容易に理解できる。そのアイスランド人の友人のひとりが、ラスクが何日間も集中して研究に没頭した後信じられないほどの食欲を示したと述懐している上述のソルスティンスソンである（彼がラスクの異母弟ハンス・クリスチャン・ラスクに宛てた書簡については、コーロンの「ラスムス・ラスクの生涯についての寄稿」に収録されていることはすでに触れた）。もうひとり、後にアイスランドに帰って聖職者となったアウルトニ・ヘルガソン（Árni Helgason 1777-1869）であった。

ラスクとソルスティンスソンは、同じ時期に学生寮レゲンセンに住み、コペンハーゲン大学で学んだ（当時はアイスランドはまだデンマークから独立しておらず、まだ大学もなかったので、アイスランド人が学問を修めるにはコペンハーゲン大学で学ぶのが一般的であった）。すでにオーゼンセ時代からキリスト教の信仰に懐疑的であったラスクは、ソルスティンスソンに靈魂は不滅かどうかについての論争を挑んだこともあった。論争の翌朝にはソルスティンスソンの部屋の窓には、肉体と魂とはまったく別個な存在でこのふたつを統合する高次な存在などはないというラスクの無神論とも言える見解を展開した手紙が差し込んであったこともあったそうである。ソルスティンスソンは法律を学び、後にアイスランドに戻り州知事となった人で、アイスランドの文学や歴史にも造詣が深く、1816年のアイスランド文学会の設立に際しては、ラスクと共にその創設者となり、後には会長職も務めた。彼とアイスランドをこよなく愛したラスクとの親交は生涯絶えることはなかった。

ここで、ソルスティンスソンのラスク観を知るために、彼がハンス・クリスチャン・ラスクに宛てた書簡（1836年6月30日付）から引用する（なお、この書簡からはイエスベルセンもそのラスク伝の中で一部を引用している）。やや長い引用になるが、身近にいた友人としてのソルスティンスソンの回想は、ペーターセンの記述を補完する役割を果たしている：「ペーターセンが記したあなたのお兄さんの人となりについて付け加えるべき新しくて重要な

ことは何もありません。昨年の春、このことについてヘルガソン教区牧師と話をしましたが、ラスクの人となりはまったくそのとおりで大切なことはなにも見過ごされてはいないという点で私たちの意見は同じでした。言っておきたいのは、アイスランド人の中でヘルガソンと私ほどあなたのお兄さんと親密で長い友人関係にあった者はだれもないということです。この友達づきあいは彼が大学に入ったときにはじまり、彼がペテルスブルグに行って帰国した後は手紙のやり取りは少なくなりましたが、お亡くなりになるまで途切れることはありませんでした。彼は、学識ある、思いやりのある、善良な人として、ヘルガソンのことを崇拝していました。私といるときは、彼は、陽気な雰囲気、少し学問的な教養、社交的な才能を示そうとしていたように思います。(中略)

私はお兄さんについての記憶を詳しく述べたいと思います。読んでいただければ、以下のことを追加する理由がお分かりになるだろうと思います。

彼は、体型は小さくてほっそりしていましたが、すばやく、敏捷で、しなやかでした。私の見るところ彼は少しO脚でした。それが彼の姿勢と歩き方をぎこちなくすることに関係していたと思います。歩き方は、せかせかとして安定性を欠いていました。

彼の心は、白みを帯びた顔色に加えて、大きく、青く、きらきら輝いている目になによりもはっきりと現われていました。彼にとっては、知らんぷりをするということは不可能でした。ですから、彼を知っている者にとっては、その表情の特徴から、喜んでいるのか不快に思っているのかに至るまで心の中の感情のすべてを読み取るのは簡単なことでした。彼は、せかせかと落ち着きなく歩いたように、しゃべり方も早口でした。この偉大な言語学者に関して奇妙なことは、日常会話では発音にもアクセントにも非常に無頓着だったことです。彼は、ウィットに富んだ話し方はしませんでした。ウィットや陽気な雰囲気はいつでも受け入れる用意がありました。しかし、ある種の生真面目さが、彼の性格をいつも支配している特徴でした。それで、私はときどき「今日は君はまるで校長先生にでもなったようだね。今晚いっしょに夕飯を食べて楽しくやろうよ」と言ったものでした(この会話の部分はアイ

スランド語で、彼らの会話が日常的にアイスランド語でなされていたことが分る)。

社交的な場に関しては、彼は仲間内では陽気でしたが、大きな集まりでの社交にはまったく不向きでした。というのは、彼には本当のこと以外を言うことは不可能なことでしたし、隠しておくのが一番いいことも言わずにおくことなどでできませんでしたから。彼がストックホルムでエッダを出版する際(この件に関しては後述する)には、これはコペンハーゲンのある人たち、つまり、ソーラシウス親子、ソルケリン、P.E. ミュラー等々のことですが、を怒らせてしまうことになるということ(ソーラシウス親子というのは、デンマークで活躍したアイスランド人でエッダやサガの北欧文学を編集したSkúli Þórðarson Thorlacius (1741-1815) とその子の古典語学者Børge Riisbrigh Thorlacius (1775-1829)、ソルケリンは、アイスランド人でデンマークでは文書保管員を務め古英語の叙事詩『ベオウルフ』の写本の発見者として有名なGrímur Jónsson Thorkelin (1752-1829)、P.E. ミュラーは、ラスクのネクロロギーを書いたコペンハーゲン大学のミュラー神学教授のこと)、彼が計画している旅行計画に関しても十分慎重に考えた方がいいということを、彼に伝えたことがあります。私が受け取ったのはつぎのような返事でした: 「私は正しいことをした(まさに彼の言うとおりののですが) のに、なぜ彼らは私を攻撃するのですか」(この部分もアイスランド語)。あなたはこれについては、もっといろいろなことを、書簡集で知ることができます。彼は、自分の考えに自信がある場合には、だれに対してでも、口頭であっても書簡であっても、年齢や地位等に拘泥することなしに、反対意見を述べました。このことが何度も彼には悪い結果をもたらし、「ラスクは自分の才能と数少ない有力者の援助だけで行き着くところまで突き進むことになったのだ」と周りが断言できるほどなのです。

故ラスクは、善良で、デリケートで、高潔な性質でした。しかし、本当にはかり知れない学問的なストレスのために神経が参ってしまいました。その結果として何が生まれたのでしょうか。その時その時でいろいろな人に対する一種の人間不信だったのです。はじめのうち(これはすでに非常に早くか

らのことで、外国への大旅行以前のことですが）は、ヘルガソンと私、そして当然ペーターセン、以外はだれもこのことに気づきませんでした。

学問に関しては、言語はラスクにふさわしいものでした。大学に入るとすぐに、彼の心はまさに言語にとりつかれたようでした。彼は、私に何度もホイスゴーア（Jens Pedersen Høysgaard 1698-1773：デンマークの文法家）の文法やその他のテーマに関する多くの事柄について語りました。（中略）彼の言語研究に対する熱意と勤勉さはまったく驚くべきものでした。このことはよく知られた事実なので余計なことかもしれませんが、ひとつだけ例を挙げましょう。私が大変な英語の崇拝者であるけれども修得するのが苦手だと知ると、彼は、頼んだわけでもないのに、およそ48時間で簡約英文法を書き上げ、送ってくれました。これは彼が私よりもそれほど英語に強かったとは思えないときのことでした。彼が送ってくれた草稿は、ブルーン（Thomas Christopher Bruun 1750-1834：デンマークの英文法家でコペンハーゲン大学で英語を教えた）その他の簡約文法のコピーではないとすぐに分りましたが、その原稿がラスク流の特異な言語的天才で考案されたまったく独創的なものであることを知ったとき、私は本当に驚いてしまいました。

とくにアイスランド語は、彼はネイティヴ・スピーカーと同じように話したり書いたりすることができました。たまにアクセントの点で外国人だと気づかされたことがありましたが、それは唯一彼がしゃべり方に注意を払わず、いつものように早口でしゃべったときだけでした。彼はいつも言語の純正さを心がけていましたので、あるときアイスランドから私に手紙をくれて、すぐ後から誤りがあったので訂正してほしいという旨の別の手紙が届いたことがあります。その誤りというのも私が気づきもしなかった微妙なものだったのですが。

宗教に関しては、彼は純粋な理神論者でした。私の知る限り、彼は哲学に夢中になることはありませんでしたが、自分自身の健全な理性と鋭い判断力の助けだけで、自分の宗教体系を作り上げることができると思っていました。これについては、私たちはしばしば仲間同士の論争をし、いつも私が言い負かされました。結局、私はそんなスケールが大きくて疑義の多いテーマで彼

と言い争うのはまったく無駄なことだと気づきました。こんなこともありました。ある晩私たちは大変な宗教論争をしたのですが、本質的な結論に関しては合意できませんでした。私の記憶違いでなければ、それは神の摂理と靈魂の不滅の問題でした。街に出ていっしょに食事をした後、私たちは夜中の12時近くに別れました。しかし、私がとても驚いたのは、翌朝すぐに彼から見事に書きつづられた長文の手紙（著作集に収録されています（ここでいう著作集とは手紙の受取人ハンス・クリスチャン・ラスクが編集した『ラスムス・ラスク：著作集』*Rasmus Rask: Samlede Afhandlinger* (1834-38) のこと))を受け取ったことでした。その中では、論争の時に私が正しく理解していないと思った点について、彼の主張が改めて詳しく解説されていました。（中略）

ラスクは、人の痛みの分かる信頼できる友人でした。いくらでも例を示すことができます。彼は、きょうだいやそのほかの家族、とりわけこの手紙の宛名人である弟のあなた、を心から愛していました。一度私はこんなことを言ったことがあります。「君にはそんなことをする経済的な余裕はないじゃないか。まず自分のめんどろを見給え」。その返事は「大丈夫だよ。僕のことはなんとかなるさ」（この会話も、例によって、デンマーク語ではなくアイスランド語でなされている）でした。このようなときには、彼はいつも熱っぽく頑固で、どんなことに關しても、前もって決めていた結論を変えさせることは不可能でした」。以上、長い引用になったが、ペーターセン同様、またペーターセンとは異なった視点から見たラスク像が鮮明に浮かび上がってくる。同じアイスランド人でも、ラスクにとっては、10歳年長のヘルガソンよりも、年が近いソルスティンスンの方が同じ目線で話せる友人だったのであろう。逆に、ソルスティンスンの方も、同じ学生寮で苦楽を共にし、本音で語り合える友人、デンマーク支配下の母国アイスランドをこよなく愛してくれる物好きなデンマーク人、デンマーク語ではなく母語のアイスランド語で会話ができる相手、そしてなによりも天才言語学者としてのラスクの才能と人間性に強い魅力を感じていたのである。

ラスクはコペンハーゲン大学で青雲の志を抱いて学び始めた。幾多の俊才を生んだ学生寮レゲンセンにも希望どおりに入ることができた。初年度こそ経済的に生活は厳しかったが、同郷の莊園主ビュロウの知己を得て、その援助を得るようになった。学問的には、コペンハーゲン大学教授ニュロップに古い北欧語の知識を高く評価された。神学を捨てて言語研究にいそしんだものの、言語学にも造詣の深かった神学教授ミュラーの支援も受けた。ラスクが、こよなく愛したアイスランドとアイスランド語をとおして、同じレゲンセンの寮生であったヘルガソンとソルステインソンを終生の友人として得た。このように見てくると、ラスクの大学生生活の出だしは順調であったのである。このまま着実に言語学の道を進んで行けば、ラスクの人生はまったく異なったものになったかもしれない。しかし、デンマークのロマン主義詩人エーレンスレイヤー (Adam Gottlob Oehlenschläger 1779-1850) の『善なる者バルドル：ある神話的悲劇』(*Baldur hin Gode*) (バルドルは北欧神話の主神オージンとその妻フリッグとの間に生まれたが、姦計により盲目の弟ヘズに弓で射殺された) と題する詩についての批判を発表してから、ラスクの人生は激しい荒波に飲み込まれていく。それは大学に入りたてのラスクが、ニュロップの推薦を得て、1808年に『コペンハーゲン学術情報誌』(*Københavnske Lærde Efterretninger*) 第4号に寄稿したものであった。エーレンスレイヤーは、はじめは王立劇場の役者であったが、コペンハーゲン大学で学び、ドイツ、フランス、スイス、イタリアに旅し、各地の著名人とも交際した。北欧の神々や北欧の歴史に題材をとり、『善なる者バルドル』を収録した『北欧詩』(*Nordiske Digte*) (1807) 等の詩集を発表したほか、『千夜一夜物語』を基にした『アラディン』(*Alladin*) (1805) 等の戯曲も手がけた。コペンハーゲン大学の教授も務めたデンマークを代表する詩人のひとりである。当時デンマーク文壇の花形であったエーレンスレイヤーの批判をするという行為は、大変勇気があることであったのは言うまでもない。

これまであまり語られることのなかったこの事件に関しては、キーステン・ラスクの『ラスムス・ラスク：小さな国の大きな思想家』に、調査結果が簡潔だが明解にまとめられている (pp.48-54)。ここでは同書の内容を抜粋しな

から顛末を概観する。ラスクが問題にしたのは、エーレンスレイヤーの作品そのものではなく、その中で用いられた単語の問題であった。ラスクは「ことばは詩的でこの詩人が優れた詩的表現をすることに腐心していることが明確に見てとれる。しかし、『バルドル』は彼がドイツ滞在中に詩作したと序文でも言っているように、その特徴が極めて明確に認められる。あちこちでドイツ語的あるいは非デンマーク語的表現が用いられているのである」と指摘したのである。ラスクが具体的に挙げた単語のうち、ドイツ語そのものとして批判したのが当時デンマーク語には存在しなかったurkraft「原初的な力、根本的な力」という単語であった。この指摘自体は小さな接辞ur-（ドイツ語の接頭辞；元々は「…から外へ」を意味し、英語のoutとも語源的に関連のある前置詞だったが、現在ではUrform「原形」（cf. Form「形」）、Ursprache「祖語」（cf. Sprache「言語」）、Urstand「原始状態」（cf. Stand「状態」）のように単語の前に付いて「根源、祖先、原始」等の意味を付加する）に関することであったが、ラスクの論争を挑むような態度は、コペンハーゲンの知識階級には衝撃的であり、だんだん大きな事件にふくれ上がっていった。当時最大の花形詩人に対するラスクの批判に、挑発的な反論をする者が現われたのである。それがラスクの終生の宿敵とも言える文献学者・歴史学者クリスチャン・モルベック（Christian Molbech 1783-1857）で、二人の間には激しい論争が繰り広げられることになる。

モルベックはコペンハーゲン大学で法律を学び始めたがすぐに断念し、大学を卒業しないまま王立図書館の司書となった。非常に博学で、彼には歴史や文学史に関する著作が多いが、中でも『デンマーク語辞典』（*Dansk Ordbog*）（1933）、『デンマーク語方言辞典』（*Dansk Dialektleksikon*）（1841）や古デンマーク語の辞書『デンマーク語語彙集』（*Dansk Glossarium*）（1857-66）等がよく知られている。最終的には彼はコペンハーゲン大学の文学史の教授に就任したが、当時は一刻でも早く研究者としての頭角を表わして教授のポストを得ることを切望していた。早く世間に認知されたいというラスクとモルベックに共通の欲望が、些細なことを機にぶつかり合った時期でもあった。

モルベックの反論は、urkraftはけっしてドイツ語ではなく、ur-はかねてか

ら言われていたように、音の変化はあるものの、ar-, ær, or-と同様に北欧語であるというものであった。モルベックはさらに、新語urkraftがデンマーク語に取り入れられるのはいいことで、urstof「原材料」、urtid「原始時代」、urverden「原始世界」等も借用されるべきで、そのことは詩人にとって益になるだろうとも主張した。しかし、モルベックは言語学的説明で、ラスクに太刀打ちできるはずもなかった。ラスクは、ur-「原初の」の起源と発達について、デンマーク語だけではなくドイツ語、オランダ語、英語、ラテン語、アイスランド語、スウェーデン語、ノルウェー語等の例を挙げ、北欧語の接頭辞ar-, ær-, er-, or-とは異なり間違いなくドイツ語であり、「外国の羽毛で身を飾るより自分自身のものを洗練し改良する方がはるかに賢いのではないのでしょうか」と言い、デンマーク語grundkraft「原初的な力」があるのに、外国語の接頭辞をつけたurkraftを用いてもどこにも利点はないと断言した。皮肉っぽく、接頭辞を何でも混同するのは、årbog「年報」(år「年」+bog「本」)やurmager「時計屋」(ur「時計」+mager「職人」)の語頭のår-やur-をひとつの万能な接頭辞で説明するようなものだとも言い切った。要するに、モルベックを完膚なきまでに論破したのである。

これに対するモルベックの返事は「真実は様々な角度から見ることによって初めて勝ち取られる。それ故、R.K.ラスク氏は、異論の多い接辞の解明に貢献するために、過剰すぎるくらいはあるが、いかなる面倒も厭わない人として、デンマーク語を愛し育てようとする万人の感謝に値する。(中略)今はアイスランド語ではなくデンマーク語について語っているのである。デンマーク語に批判の鞭をあてるには、アイスランド語を理解するよりもっと大切なことがある」という慰めだが毒を含んだものであった。アイスランドを北欧語の原点とみなすラスクにとっては、アイスランド語を持ち出すことは必然であったし、北欧語の古い言語状態を色濃く残しているアイスランド語を比較の対象として引用することは、言語学的観点からも当然のことだが、モルベックはラスクのアイスランド語へのこだわりを皮肉ったのである。モルベックは、最終的には自分の間違いを認めざるを得なかったが、ラスクは些細な問題を大げさにする人物だという非難のことばを、捨てぜりふのよう

に残してこの論争を一方的に終わりにした。これによって、ラスクとモルベックとの間のur-論争は一段落した感があるが、二人の対立は後にコペンハーゲン大学の教授のポストを巡って再燃することになる。その運命的な確執については後述する。

しかし、モルベックが論争から下りたことで問題は解決しなかった。モルベックの友人グルントヴィがこの論争に参戦し、ラスクを揶揄する脚韻詩を発表したのである。

「ラスク氏の行動に寄せて」

アイスランドの書物で意味をなすものもあり、

不可思議なものもある。

私は密かに思う。

アイスランドの聖域¹⁾で受け入れられるためには

ことば以上の別のなにかがあるのだろうと。

それに、接辞urはBurr²⁾とは遠く離れている。

さらに私は思う。

人は単語を小さく分割するだけでは大きくはならないものだ。

もちろん、大そうな術学者は例外だが。

- 1) 私は、ニュロップ教授がラスク氏のアイスランド語の早熟な知識に大いに期待を寄せていることを、よく理解している。
- 2) アース神たちの祖先、すなわち北欧神話（ここではur[ウル]とBurr[ブル]が韻を踏み、主神オージンの父親ブルによって北欧神話を象徴的に代表させている）

ラスクがはじめて公にした論文は、この風刺詩によって、ラスクという人物が「単語の分割屋」あるいは「術学者」であるかのような世間の評価にさらされるという結果に導いてしまったのである。ラスクの純粋に言語学的な論争をしようという真剣な望みは否定された。世間はラスクのur-という小さな接辞をとおしての識見、比較言語学的試みを正当に評価できなかった。世

間はラスクにどうしてもいい些細なことに埋没してしまう人間というレッテルを貼ってしまったのである。以上が、キアステン・ラスクによるur-論争に関する一連の経過の要約である。

グルントヴィについては、レニングによるラスク伝のところで触れたが、その時はレニングの専門がグルントヴィ研究であったという事実に言及しただけであった。ここで、デンマークの生んだこの偉大な聖職者・詩人・教育啓蒙家について概説しておこう。グルントヴィは1783年の生まれだから、ラスクより4歳年長ということになるが、この論争の発端となったエーレンスレイヤーの『善なる者バルドル』の公刊と同じ1807年に『宗教と礼拝について』(*Om Religion og Liturgi*)という当時のデンマーク社会の宗教的停滞に鋭いメスを入れた著書を上梓し、新進気鋭の宗教家として華々しい脚光を浴び始めていた。また、北欧の文化史も研究し『北欧神話あるいはエッダ学の展望』(*Nordens Mytologi eller Udsigt over Eddalæren*) (1808) 等、たて続けに著書を発表していた。グルントヴィは、3度イギリスに留学し古英語を学び、北欧のヴァイキングを題材とした古英詩『ベオウルフ』の翻訳も試みた。イギリスの自由な教育制度の影響を受け、死んだ言語であるラテン語を学ぶことに基礎を置いた中世以来の教育に反対し、学問を追及する従来の大学とは異なる、生きた言語であるデンマーク語を用いる教育組織を提唱した。この結果が、現在もデンマーク国内からばかりでなく世界各国からの学生を集めているフォルケホイスコーレ (folkehøjskole)、すなわち、高等国民学校で、ここでは学生たちが、老若男女、集団生活をしながら自由で幅の広い知識、教養、技術の獲得を目指している。なお、グルントヴィは、政治活動はしなかったものの国会議員に3度選ばれている。

1808年当時、血気盛んな若干25歳であったグルントヴィは、旧来のキリスト教に向けていた批判の矛先を、友人のモルバックをかばってラスクにも向けたのであろうが、この詩によって傷ついたラスクの心が癒やされることは終生なかった。グルントヴィは3度の結婚を経験し、躁鬱病で苦しんだが、社会的には成功者として89歳でこの世を去った。その社会への貢献を記念して、

コペンハーゲン市内にはグルントヴィ教会と名づけられた教会が建てられている。この教会は、讃美歌の作曲も手がけていたグルントヴィ（『デンマーク教会のための讃美歌集』（*Sangverk til den Danske Kirke*）（1837-75）という著作がある）を偲んで、正面はパイプオルガンをモチーフにした現代的建造物で、観光名所のひとつにもなっている。グルントヴィは、若気の至りでラスクを非難する風刺詩を作ったことを悔いていたのであろうか、ラスクの死のすぐ後、その功績を賛美する詩を新聞紙上に発表した。遅きに失した償いであった。

ラスク自身は、このur-論争について何も語っていないし、援助を受けていたビュロウ宛の手紙でもこのことには触れていない。ペーターセンのラスク伝でも扱われていない。当時のラスクは、ビュロウに対してはエッダをはじめとするアイスランド語の研究の必要性を熱っぽく書き綴るのを常としていた（これは援助を必要とする理由の説明でもあった）が、それに関連して、エーレンスレイヤーとグルントヴィの名前が出てくる箇所があるので引用する。それはすでに引用した1808年11月29日付の書簡の最後の部分で、「最近には北欧の考古学的な機運がコペンハーゲンの学界では大いに拡大しています。ソーラシウス教授（前述のソーラシウス父子の息子の方）はアイスランド語を研究されておられますし、アイスランド人を時間講師として学んでいる人もおります。ふたりのアイスランド人がアイスランド語文法の仕事をしておりますし、辞書も力強く育とうとしております。これには私も参加することになりそうです。ソーラシウス（参事官）（ソーラシウス教授の父親）は『ニヤウルのサガ』の序文を書き終わり、これが出版されるまではアーナマグネアンスケ委員会（1760年に設立されたアイスランド語の文献を蒐集・保存し公刊する組織で、現在ではアーナマグネアンスケ・インスティテュート（*Arnamagnæanske Institut*）として、コペンハーゲン大学内でその活動を続けている。また、この名称は文献蒐集を手がけたアイスランド人文献学者アウルトニ・マグヌースソン（*Árni Magnússon* 1663-1730）に因んでいる）には加わらないと申し出ています。ヴェアラウフは『エギルのサガ』の索引作り、他の箇所も同様の段階にあります。に取り組んでいます。新しくはN.E.S.

グルントヴィによる『北欧神話あるいはエッダ学の展望』も出ました。後はエーレンスレイヤーとその仲間が一般の読者の間にこの機運を広げてくれることだけです。と言いますのも、そうしないと、現在の学界の熱もすぐに冷めてしまい、再び機運を盛り上げるのはおそらく難しいからです」と、淡々とアイスランド文学研究の現状認識を述べているのみである。このときはur-論争の熱気もまだ冷め切らず、ラスクの心は深く傷ついていたはずではあるが...

因みに、ラスクは詩人としてのエーレンスレイヤーを高く評価していた。言語的観点から、とくに彼の『アラディン』が好きであったことは、前掲のラスクの異母弟に宛てたソルステインソンの書簡でも触れられている。後に、ラスクがインドへの大旅行を企てたとき、『アラディン』を手放さなかったことも付け加えておきたい。そして、エーレンスレイヤーも、ラスクが世界の言語学界で名声を博すると、『善なる者バルドル』の1831年版では、最初にラスクが指摘したように、urkraftをgrundkraftに修正した。このように、言語史的には、ur-はドイツ語からの借用であるというラスクの主張が正しかったことが世間的にも認められたのだが、今日のデンマーク語で生き残ったのはgrundkraftではなくurkraftであるという皮肉な結果は、ラスクの悲劇性の一面を象徴的に表わしている。ラスクはここで正しいものが必ずしも受け入れられないこと、受け入れられるためにはなにか別の要素も必要であるという世間知を学ぶべきであった。このときラスクは大学に入りたてで、一途で血気盛んで、自己の考えを世間に披瀝し、学界の認知を受けようという野望に燃えていた。そのためには、自分が真理であると信じたものに関しては、相手がだれであろうとも敢然と立ち向かうとしたのである。ラスクは、オーゼンセ大聖堂学校では、私見を述べ、自説を強く主張し、教師の著書の批判をしても、思いやりと寛容さでもって許容された。ラスクの素朴な人間性、その才能と真摯な努力に対する敬意、その将来に対する期待がそうさせたのである。しかし、コペンハーゲンでは、いかに大学生といえども権威にたてついたラスクにあたる風は冷たく、容赦のないものであった。

ラスクがはじめて公にした論文でのエーレンスレイヤーの用語urkraft批判、

それを巡ってのモルベックとの論争、グルントヴィによる風刺詩の発表、これらすべてが起こったのは、1808年、ラスクがコペンハーゲン大学で事実上学び始めた最初の年のことであった。ラスクには濃密すぎるほどの一年であった。このときラスクは弱冠二十歳である。学問的には早熟といえは早熟であるし、世間的には未熟といえは未熟である。世間が、ラスクの早熟な才能を評価し、未熟な論争の仕方に寛容であれば、ラスクの学問的人生の幕開けは平穏なものであったろう。しかし、ラスクへの世間的な偏見を醸成し、ラスクの精神に修復不可能な深い傷を残したという点で、この事件がラスクの人生に与えた影響は極めて大きい。ラスクの悲劇的人生の第一歩はここにはじまったと言っても過言ではない。

(この稿続く)

参考文献

- Andersen, Poul. 1937. "Rasmus Rask", in: Selskab for Nordisk Filologi. *Fra Rask til Wimmer* (København), pp.7 - 33.
- . 1938. *Rasmus Rask: De fynske Bønders Sprog*, København.
- Antonsen, Ekmer H. 1962. "Rasmus Rask and Jacob Grimm: Their Relationship in the Investigation of Germanic Vocalism", *Scandinavian Studies* 34, pp.183 - 94.
- Bandle, Oscar *et al.* (ed.) 2002. *The Nordic Languages* Vol.1, Berlin/New York.
- . 2005. *The Nordic Languages* Vol.2, Berlin/New York.
- Bang, Jørgen *et al.* 1978. *Gyldendals Tibinds Leksikon*, København.
- Bjerrum, Marie. 1956. "Hvorfor kom Rask ikke til Sverige i 1810?", *Festskrift til Peter Skautrup* (København), pp.375 - 81.
- . 1957. "Hvorfor rejste Rask til Kaukasus og Indien?", *Danske Studier* (September), pp.80 - 100.
- . 1959. *Rasmus Kristian Rasks Afhandlinger om det danske sprog*, København.
- . 1982. "Rask, Rasmus", *Dansk biografisk Leksikon* 3. Udgave XI, (København), pp.646 - 51.
- Blangstrup, Chr. *et al.* 1915-1930. *Salmonsens Konversations Leksikon* 2. Udgave, 26 Bind, København.

- Dahlerup, Verner *et al.* 1919-56. *Ordbog over det Danske Sprog*, 28 Bind, København.
- Danstrup, John og Hal Koch *et al.* 1962-66. *Danmarks Historie*, 14 Bind, København.
- Dideriksen, P. 1960. *Rasmus Rask og den grammatiske tradition*, København.
- Christensen, Carl C. 1932. "Rasmus Rask - Hans død, og hvad han efterlod sig", *Danske Studier*, pp.1 - 21.
- Djupedal, Reidar. 1956. "Rasmus Rask og 'Videnskabernes Selskabs Danske Ordbog'", *Festskrift til Peter Skautrup* (København), pp.383 - 96.
- Dyggve, Holger P:N. 1932. "Tre ikke tidligere trykte breve fra Rasmus Rask", *Danske Studier*, pp.139 - 47.
- . 1933. "Finn Magnusen og Rasks store rejse", *Danske Studier*, pp.17 - 22.
- Flom, George T. 1939. "On the History of Views about the Vowel System of Old Norse", *JEGP* 38, pp.549 - 51.
- Fussing, Hans H. 1932. "Raskinana", *Danske Studier*, pp.148 - 56.
- Grimm, Jacob. 1812. "Vejledning til det Islandske eller gamle Nordiske Sprog af Rasmus Kristian Rask", *Allgemeine Literatur-Zeitung* 31 - 34. (Repr. in: *Jacob Grimm, Kleinere Schriften* 4 (Hildesheim/Zürich/New York,1991), pp.65 - 73; *Kleinere Schriften* 7 (Hildesheim/Zürich/New York,1991), pp.515 - 30).
- . 1825. "Frisisk Sproglære, udarbejdet efter samme plan som den islandske og angelsaksiske af R. Rask" in: *Göttingische gelehrte Anzeigen* (1826), pp.81 - 107 (Repr. in: *Jacob Grimm, Kleinere Schriften* 4 (Hildesheim/Zürich/New York,1991), pp.361 - 76).
- 橋本淳他. 1999. 『デンマークの歴史』、創元社.
- Henriksen, Carol. 1996. "Rask, Rasmus Kristian", in: Harro Stammerjohann (ed). *Lexikon Grammaticorum* (Tübingen), pp.774 - 76.
- Hjelmlev, Louis. 1932 - 35. *Rasmus Rask Udvalgte Afhandlinger*, 3 Bind, København.
- . 1933. "Rasmus Rask og Sverige 1812 - 18", *Nordisk Tidskrift för Vetenskap, Konst och Industri* IX, pp.445 - 56.
- . 1951. "Commentaires sur la vie et l'œuvre de Rask", *Travaux du Cercle Linguistique de Copenhague*, Vol.XIV, 1973, pp.3 - 16.
- Hjelmlev, Louis og Marie Bjerrum. 1941-68. *Breve fra og til Rasmus Rask*, 3 Bind, København.
- Horstbøll, Henrik *et al.* 1988-98. *Danmarks Historie*, 3 Bind, København.
- Jakobsen, Helge Seidelin. 1986. *An Outline History of Denmark*, København. (高藤直樹訳 1995. 『デンマークの歴史』、ビネバル出版.)
- Jespersen, Otto. 1918. *Rasmus Rask*, København/Kristiania.
- . 1922. *Language: Its Nature, Development, and Origin*, New York.

- . 1926. *Sprogets Udvikling og Opståen*, København.
- . 1932. "Rasmus Rask", *Politikens Kronik*, 14.11.32.
- . 1938. *En sprogmands levned*, København.
- 桑宏一. 1975. 「ラスムス・ラスク」、月刊『言語』Vol.4, No.9, pp.78 - 83.
- Jones, William. 1786. "On the Hindu's", in: Lord Teignmouth. *The Works of Sir William Jones* Vol.1(London,1807), pp.19 - 34.
- Kålund, Kr. 1897. "Bidrag til R.Rasks lævned" , *Dania* 4, pp.129 - 43.
- Lund, Jøren *et al.* (ed.). 1994-2002. *Den Store Danske Encyklopædi*, 20 Bind med Supplement, København.
- Malone, Kemp. 1952. "Rasmus Rask" , in: Thomas.A.Sebeok(ed). *Portraits of Linguistics* Vol.I (Bristol, 2002), pp.195 - 99.
- Müller, P.E. 1833. "Nekrolog: Professor R. Chr. Rask", *Danske Litteraturtidene*, pp.1 - 31.
- Ny kgl.Samling 389 ek 80* (Rasks dagbog 1818 - 32).
- Pedersen, H. 1916. *Et Blik på Sprogvidenskabens Historie*, København.
- . 1924. *Sprogvidenskab i det nittende Aarhundrede: Metoder og Resultater*, København.
- . 1932. "Indledning" , in: Louis Hjelmslev. *Rasmus Rask Udvalgte Afhandlinger* Bind I (København), pp.XIII - LV.
- Petersen, N.M. 1834. "Bidrag til Rasmus Kristian Rasks levned" , *Samlede Afhandlinger af N.M.Petersen Første Del* (København, 1870), pp.217 - 343.
- Rask, Kirsten. 2002. *Rasmus Rask—store tanker i et lille land*, København.
- Rask, Rasmus Kristian. 1811. *Vejledning til det Islandske eller gamle Nordiske Sprog*, København.
- . 1817. *Angelsaksisk Sproglære tilligemed en kort Læsebog*, København.
- . 1818. *Undersøgelse om det Islandske eller gamle nordiske Sprogs Oprindelse*, in: Louis Hjelmslev. *Rasmus Rask Udvalgte Afhandlinger* Bind I, København, 1932.
- . 1818. *Anvisning till Isländskan eller Nordiska Fornspråket*, Stockholm.
- . 1825. *Frisisk Sproglære*, København.
- . 1826. *Forsøg til en videnskabelig dansk Retskrivningslære*, København.
- . 1830 a. *A Grammar of the Danish Language for the Use of Englishmen*, København.
- . 1830 b. *A Grammar of the Anglo-Saxon Tongue A New Edition* (Trans. by B. Thorp), København.
- . 1932. *Kortfattet Vejledning til det oldnordiske eller gamle islandske Sprog*, København.
- Rönning, F. 1887. *Rasmus Kristian Rask. Et Mindeskraft i anledning af Hundredårsdagen for hans Fødsel*, København.

- 新谷俊裕 (訳注). 1988. 『オットー・イエスベルセン：ラスムス・ラスク』、大学書林.
- Skårup, Povl. 1964. *Rasmus Rask og Færøsk*, København.
- Sverdrup, Jakob. 1920. "Av Sprogvidenskabens Historie. Ihre - Rask - Grimm", *Nordisk Tidskrift för Vetenskap och Industri* I, pp.459 - 77.
- Søndberg, Olaf. 2001. *Danmarks Historie*, Århus.
- Thomsen, Vilh. 1887. "Rasmus Kristian Rask", *Vilh. Thomsen Samlede Afhandlinger Bind I* (København/Kristiania, 1919), pp. 125 - 44.
- . 1925. "Rask, Rasmus Kristian", in: Chr. Blangstrup (ed). *Salmonsens Konversations Leksikon Bind XIX* (København), pp.937 - 39.
- Thomsen, Vilh.(Kr.Sandfeld). 1940. "Rask, Rasmus Kristian," in: P. Engelstof og Svend Dahl (ed). *Dansk biografisk Leksikon XIX* (København), pp.180 - 94.
- Thorsøe, Alex. 1879. *Den Danske Stats Historie fra 1814-1848*, København.
- Topsøe=Jensen, H. 1928. *Oehlenschläger Poetiske Skrifter* III, København.
- Wimmer, Ludv. F.A. 1887. *Rasmus Kristian Rask*, København.
- Yamamoto, Fumiaki. 1986. "On Rask's Old English Grammar", *In Honor of Shigeru Takebayashi* (Kenkyusha), pp.550 - 65.
- 山本文明. 1995. 「Rask, Rasmus (Kristian)」、佐々木達・木原研三編.『英語学人名辞典』(研究社), pp. 284 - 85.
- . 1996. 「ラスク Rask, Rasmus Kristian」、亀井孝・河野六郎・千野栄一編.『言語学大辞典』第6巻(三省堂), p. 1518.
- . 2005. 「悲劇の言語学者ラスムス・ラスク——誕生から大学入学まで——」、『異文化』6 (法政大学国際文化学部), pp.143 - 90.